

下肢静脈瘤の手術をすすめられた方へ、 「あなたにその手術、本当に必要ですか？」

1. はじめに

血管内焼灼術（しょうしゃくじゅつ）は、病気の静脈を焼いてふさぐからだに負担の少ない下肢静脈瘤の治療です。レーザーと高周波電流（ラジオ波）を使った方法があり、一般にレーザー治療やラジオ波治療と呼ばれています。2011年に保険適用となって日本中で行われるようになりましたが、一部のクリニックや病院で“健康な人（下肢静脈瘤でない人）”や“軽症で治療が必要ない人”に対して血管内焼灼術が行われるようになってきました。学会ではこのような治療を“不適切治療”と呼び、すでに医療関係者に対しては注意喚起を行っています。

血管内焼灼術をどのような場合に行ったほうがいいのかという指針は、日本静脈学会の「下肢静脈瘤に対する血管内焼灼術のガイドライン 2019」に示されています。ただし、このガイドラインは不適切治療を念頭において作られたわけではないため、ガイドラインを補う「不適切治療症例に関するガイドライン」も作られました。このパンフレットでは、2つのガイドラインにある“血管内焼灼術がどのような人に必要で、どのような人に必要ないのか？”について解説します。

2. なぜ不適切治療がいけないのか？

そもそも不適切治療のどこが問題なのでしょう？それは、手術をしても“手術の効果がなく、ただ足に傷がつくだけ”だからです。もともと足が痛くて手術した方でも、不適切治療の場合は痛みの原因が静脈瘤ではないので痛みは取れません。また、手術によって静脈は機能しなくなってしまいます。多くの場合は他の静脈がその分だけもっと働いてくれるので、軽いむくみがおこる程度ですが、将来、心臓や足の動脈の病気になったときのバイパス手術に使用する静脈がなくなってしまいます。数は少ないですが手術で神経がしびれる、傷が化膿するなどの合併症をおこすこともあります。

3. どのような場合が不適切治療なのか？

不適切治療とは“治療が必要ない人に対して手術が行われる”ことを指します。どのような場合に手術が必要ないのか説明します（表1）。

表1：手術が必要ない場合

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">(1) 静脈瘤はあるが、だるさやむくみ、皮膚炎などの症状がない(2) 正常な静脈(3) 血管が太いけれど、静脈弁の異常（逆流）がない(4) 静脈弁の異常が、静脈の一部にとどまる(5) 下肢静脈瘤の重症化や肺血栓塞栓症（エコノミークラス症候群）を防ぐ目的 |
|--|

(1) 静脈瘤はあるが、だるさやむくみ、皮膚炎などの症状がない

ポコポコとした静脈瘤があっても心配で受診しても、足のだるさ、むくみ、こむら返り、皮膚炎などの症状がない患者さんはたくさんいます。下肢静脈瘤の手術は症状が出てからでも十分に間に合いますし、一生症状がない患者さんも多くいるので慌てて手術をする必要はありません。下肢静脈瘤は基本的に症状がなければ手術は必要ありません。

また足のだるさ、むくみ、こむら返り、皮膚炎は、静脈瘤と関係ない内科、整形外科、皮膚科などの他の病気でも起こります。症状がでた原因が静脈瘤でない方は手術をしても症状は良くなりません。よく静脈瘤が原因かどうか確認してから手術をすることをお勧めします。

(2) 正常な静脈

下肢静脈瘤の症状には、「足のだるさやむくみ、こむら返り、皮膚炎」などがあります。しかし、これらの症状が足にあっても必ずしも下肢静脈瘤の症状とは限りません。下肢静脈瘤の症状かどうかは、足の超音波検査（エコー検査）で静脈の中にある逆流防止弁の働きを調べる必要があります。検査の結果、逆流防止弁がきちんと働いていれば正常な静脈です。正常な静脈が症状をおこすことはありませんので、手術は必要ありません。

(3) 血管が太いけれど、静脈弁の異常（逆流）がない

一部のクリニックや病院では、超音波検査を行って「あなたは血管が〇〇mm 以上あって太いから手術が必要だ」と手術を勧める場合があります。手術が必要な下肢静脈瘤は、①静脈の逆流防止弁の異常があり、②静脈の太さが一定以上あり、なおかつ③症状がある場合です。静脈弁に異常がないのに単に血管が太いから手術が必要になることはありません。

(4) 静脈弁の異常が静脈の一部にとどまる

では、静脈弁に異常があれば手術をしたほうがいいのでしょうか？ もともと静脈には静脈弁がたくさんあるので一部の静脈弁に異常があっても、すぐに症状がでることはありません。たとえ、ポコポコとした静脈瘤があっても静脈弁の異常が静脈の一部にとどまっている場合は、手術は必要ありません。単なる加齢によるむくみや赤や青の細い血管が目立つ、いわゆるクモの巣状静脈瘤の方（図1）に、静脈弁の異常

がある「隠れ静脈瘤」と診断して手術が勧められる場合がありますが注意しましょう。



図1 クモの巣状静脈瘤（左）と加齢によるむくみ（右）

(5) 下肢静脈瘤の重症化やエコノミークラス症候群（肺血栓塞栓症）を防ぐ目的

癌や心臓の病気と違い下肢静脈瘤は良性の病気なので、歩けなくなったり足を切断したり、死んでしまうことはありません。手遅れになることはなく、重症になっても手術で治すことができます。したがって、軽症のうちに早めに手術をする必要はありません。

また、「下肢静脈瘤は血栓（血のかたまり）ができて心臓や脳が詰まってしまう」とテレビや雑誌などでみることがありますが、これは間違いです。足の深いところにある静脈（深部静脈）にできた血栓が肺の血管に飛ぶことをエコノミークラス症候群と言いますが、別の病気です。下肢静脈瘤は浅いところにある静脈の病気なので、エコノミークラス症候群とは直接の関係はありません。エコノミークラス症候群を予防するために下肢静脈瘤を手術することはありません。

4. では、私はどうしたらいいのでしょうか？

できれば、診察には誰かに同行してもらい、その場で手術を決めないようにしましょう。診察結果に疑問があれば、かかりつけの医師や血管外科・心臓血管外科の医師に相談しましょう。情報を集めることは大切ですが、インターネットや本にも間違った情報がたくさん書いてあるので注意しましょう。その他、以下に示す表2のような場合は、セカンドオピニオンを求めましょう。

表2 注意したほうがいい場合

-
- ✓ 「すぐに手術が必要」と言われた
 - ✓ 「血管が太いので手術が必要」と言われた
 - ✓ 「隠れ静脈瘤」と言われた
 - ✓ 「放っておくと、取り返しがつかないことになる」と言われた
 - ✓ 「血栓が飛びやすい」と言われた
 - ✓ 超音波検査の時間が短い（通常 15 分以上）
 - ✓ 一本の足に何度も手術をすることを勧められた
 - ✓ 自費の手術を勧められた
-

5. おわりに

不適切治療を行っているのはごく一部の医師や医療機関で、多くの医師は真剣に患者さんのために下肢静脈瘤の治療を行っています。不適切治療は患者さんにとっても、保険医療にとっても非常に大きな問題です。私たち日本静脈学会は、このような不必要な手術が 1 日も早くなくなるように様々な活動をしています。このパンフレットを讀んでご自分の手術に疑問をもたれた方は、あわてて手術をする必要はありません。1 回立ち止まってよく考えて、手術を受けるかどうか慎重に考えられることをお勧め致します。

(日本静脈学会 2020 年 11 月 20 日)